

在宅において肺非結核性抗酸菌症により末期呼吸不全状態を呈した症例に対し、訪問リハ介入により症状緩和を認めた一例

吉村 史郎・廣畑 淑郎

株式会社アール・ケア 訪問看護ステーション ママック

Key words / 肺非結核性抗酸菌症、訪問リハ、呼吸状態改善

【背景および目的】

肺非結核性抗酸菌症（以下肺 NTM 症）は近年増加傾向の疾患である。重症化すると労作時の強い息切れ、全身倦怠感、体重減少が生じ日常生活活動動作（以下 ADL）に強い制限を来すこととなる。今回、肺 NTM 症による末期呼吸不全状態を呈した症例に対し、訪問看護による訪問リハビリ（以下訪問リハ）にて介入する機会を得たのでここに報告する。

【症例】

60 歳代、女性、X 年に肺 NTM 症により末期呼吸不全状態と診断される。診断後から薬物療法を開始するも効果を示さず、体重減少も著明で X+1 年頃からベッドからの離床も困難となっていた。X+2 年に低栄養、脱水症状の治療にて入院されていたが症状緩和し、退院後より訪問リハ介入となる。介入時の体重 30.5 kg、1 分間の呼吸数が 30 回以上、胸郭の平坦化がみられ、吸気での胸郭拡張がみられず、スムーズな呼気への移行も困難で呼吸補助筋の過緊張も伺えた。常時在宅酸素 1.0l 使用。労作時の呼吸困難感著明であり座位保持は 2 分が限度であり、修正 Borg スケール 8~9 であった。

【結果】

本症例に対し、週 2 回の頻度で訪問リハを開始した。介入当初は呼吸介助により呼吸状態の改善を図った。一回の換気時間延長、吸気から呼気へのスムーズな移行を促すことにより、1 分間の呼吸数が 20~25 回と減少した。呼吸状態改善に伴い、ベッドから自力での起き上がり動作、室内移動が可能となるなど症状が緩和された。（修正 Borg スケール 2~3）

【考察および結論】

訪問リハでは在宅生活における活動性の向上、ADL の獲得や維持が目的の一部となる。本症例は介入当初、呼吸状態悪化により ADL に強い制限を来していたが、今回、呼吸介助実施し呼吸状態改善を図るとともに、環境にあわせた生活指導を実施したことで少しずつ活動性の向上に繋がった。今後、さらなる ADL 獲得へ繋げていくことが重要であると考えられる。

【倫理的配慮、説明と同意】

本報告はヘルシンキ宣言に基づき個人が特定されないよう匿名化し、個人情報保護について本人、家族に対し説明し書面にて同意を得た。